令和4年度
1月号

角山小だより

岡山市立角山小学校
TEL 297－2378
FAX 297－2318

校長室から

書初め作品と百人一首

３学期始業式後、５・６年生の教室では、書き溜めた作品の中から展覧会への出品作品を互いに選びあっている場面に遭遇しました。自分の考えだけで選ぶのではなく、友達の意見を聞いたり、自分の考えを言ったりすることで、よりよい作品を見る力も育っていることに気づきました。私にも児童から、「どの作品がいいですか」と尋ねられて改めて作品を見ると、始筆、終筆、縦横のバランスがとれているので「書道を習っているの？」と聞くと「いいえ、学校の授業だけです」と児童。私はびっくりしました。その児童の器用さもあるのかもしれませんが、毛筆文化があるのは世界でも限られた国です。それを学校教育によって確実に受け継がれていることにありがたさを感じました。

４年生の授業では、百人一首のかるたを学習していました。「小学生に意味がわかるの？」と疑問に思いながら、後で東先生に話を聞くと「日本の独特の５・７・５・７・７の口調がよく合って、札数は少ないけれど喜んで勉強するんです。日本人のＤＮＡなのですかねえ」とのことでした。伝統文化の継承はここでも行われていました。

５４年前の担任Ａ先生

一昨年のことです。本校の卒業生と名乗る女性の方から電話がありました。話を聞くと小学校４年生の時の担任のＡ先生のお墓参りに行きたいのだが、連絡先を知らないかとのことでした。

Ａ先生の存在すら知らなかった私は、どんな先生だったのかを尋ねました。「西大寺の方に下宿されていて、休みの日にはみんなで遊びに行ったりしていました。授業では新しい教材をつくっては挑戦される先生で、とても楽しい先生でした。残念ですが担任途中で亡くなってしまい、私は母親に連れられて葬儀に参列した思い出があります。」

どうして今頃になって連絡をとられようと思ったのかと尋ねると、「卒業してから気になっていましたが、仕事や家庭のことで精一杯で連絡をとることができませんでした。今やっと余裕ができて、先生の御親戚でもよいので連絡をとってお線香をあげに行きたいと思ったのです。」とのことでした。

電話を切り、学校に保管された当時の名簿を探しましたが、Ａ先生のお名前はあったものの連絡先などは分からず、後でその旨をお伝えしました。「残念ですが仕方ありませんね。でも気持ちの区切りがつきました。」とおっしゃってくださいました。

卒業してから何十年経っても覚えておられる女性の方のように、児童にとって先生の存在は大きく、一緒にいる一瞬一瞬がしっかりと思い出に残ります。改めて児童の成長に関わることの意味の重さを教えていただきました。